

京鹿子



1月号

京鹿子祭特集号



豊田都峰

灌響集 その二十九

草は穂になりゆく丘は人が占む
露あまた負ふ一草の悼みかな
身のぬちに露しづくして拝仏す
わが影へさそへば音とくる木の葉
わが庭のいちまい天の柿落葉
草の絮ちらせば石の業平塚

新 歴 丸山佳子

ま づ 九 字 を 切 っ て 机 上 に 新 歴
明 け て ゆ く 年 に を ん な の 愚 痴 を 断 つ
初 髪 を 結 う て も ら う て 気 に い ら ぬ
は ま ぐ り の 鳴 く 厨 房 の 愚 婦 た り し
山 眠 り 思 ひ 出 さ せ る 君 が 代 を

秀華採集

多分ここに父も来たはず雁渡し

井上 菜摘子

雁の渡ってくる頃の風の中に立つ作者。このような趣きの分かる子に育ててくれたのは父、と思えば、この趣きの中に父もきつと立ったはずだと確信する。季語の的確さを評価する。

鬼の子の不届きな沙汰陣屋裏

鈴木 鹿均

穴惑ひ草の戦ぎを見納めて

鎌田 政利

陣屋は表を固めると考えると、その裏の「不届きな沙汰」はなかなかおもしろい発見。後句のポイントは「草の戦ぎ」、少しは不安を持つての冬眠か、ふと自画像めくものも感じる。

鈴鹿 仁

法ごころ

朝もみぢ素顔と謂ふは法ごころ

風聞にいにしへ人となる小春

冬うらら京の一口通りやんせ

ひれ酒のこはくのいろに海鳴りす

つくばひの一滴に和す実千両

近 詠

和田 照海

衣被

仮の世に生死のありぬ衣被

きちきちの二畦飛んで国分寺

一山の一川のこゑハンモツク

噴井より跳ねて天魚のみづ隠れ

朝の蟬明日の辞世を繰り返す



返り花 北村香朗

大津浪残せしものに返り花
ひつそりと心こもれる返り花
長い間咲きほこりたり百日紅
盛りすぎこぶりとなりし百日紅
束にしてあと幾ばくの曼珠沙華

柿日和 藤岡紫水

老いたれば老ゆるころに柿日和
一つ鳴き連れ鳴く籠のきりぎりす
柵へだて角突き合はす鹿の秋
栗名月星も音符を奏でをり
柚子一つ掌に晩年を見詰めをり

松田都青

毎日が出発と言ふ敬老日
秋気ふと鏡の奥にゐる私
憧れの矢をもて放つ秋ごころ
老ゆるてふ美学もありてななかまど
赤とんぼ追へばあの頃逃げさうで

鷹 丹生をだまき

被災地に無力な私サンマ買ふ
腕に鷹据ゑて鷹匠背をすくと
羽ばたきを止めて悠々鷹滑空
かさこそと落葉の囁き日もすがら
乱視も可満月二つ並ぶ見ゆ

秋深む 山田をがたま

歩行練習効果あがらず秋深む
寝返りの痛さ薄れず秋深む
父母の追憶つのである秋の夜半
懸崖の菊両脇に開店す
文化の日を「明治の日」とせむ署名簿来る

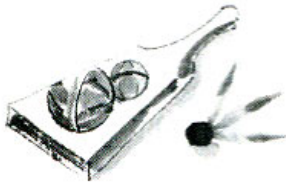
壬辰元旦 竹貫示虹

龍一字墨痕匂ふ賀状かな
今朝の春山のむかうに又高嶺
雲一つなき初空をゆく一機
満月を西に残せる初御空
水仙の傾斜の上の日は一つ



花石路 柴田朱美
花石路や水あるところ水光る
うしろより人来る気配石路の道
ここが好き鬼門の戸口に石路咲けり
触れまじき思ひに触れる石路明かり
指間より零るる月日石路の花

国訛り 丸井巴水
枯蓮へちらちら画家の首動く
国訛り出る親しさやなめこ汁
山枯れて体内時計進みがち
盛り飯は新米里の観世音
蟋蟀や硯のなぎさ筆ただす



京鹿子新賞受賞作品抄

東京都

木山杏理

ががんぼの背徳を解くすべもなし

青蜥蜴逃げこむたり風はらむ

きずな断ち難くて瓢箪ぶら下がり

十葉の花のあたりに乱気流

昏れがての風を手放す彼岸花

冬夕焼座礁してゐる縄梯子

青栗や山の音させ活けてみる

望郷のめもじとなりぬ残り柚子

青栗の小さな笹さそひ出す

女郎蜘蛛人の体温下げてる

尾の切れし蜥蜴不信の足さばき

余生とは夕陽の端の冬桜

京鹿子新賞受賞作品抄

京都府

山中志津子

浮世絵に戻りたくなり髪洗ふ

蜻蛉の高さで作詞作曲中

黒揚羽捉まへてゐる午後の熱

休止符をしんがりとして小鳥来る

まだ朝の残る木椅子や秋蝶来る

紅葉散るひとり芝居の幕開けに

寸劇の途中で秋の蝶になる

自画像は習作のまま山眠る

梶子の実の潜みゐる法華尼寺

ちやんちやんこ童話の脇役婆多し

吉備津彦に祓はる男の子七五三

アラジンのランプ転がる年の市

京鹿子新賞受賞作品

大阪府

杉井真由美

土用波受け止めかねる履歴あり

古民家や門番としてすすきの穂

土用波停泊してゐるイービス艦

萩初風余韻に浸ることもなく

新生姜地産池消とどこも言ふ

筋通すことに疲れて菊括る

にいにい蟬ブランチ無縁の日々が過ぎ

気ままさを片隅に置き菊括る

白玉や夢追ひし日も遙かにて

秋曇未来予想図まだ書けず

前略のかなはぬ便りすすきの穂

柿だけが留守番してゐる父の家

京鹿子新賞受賞作品抄

福山市

北村 梢

いち速く生れ二の丸の蟬となる

一遍忌蓮華つつじの返り咲く

竹林の途切れし辺り蓼の花

団栗落つまた一つ落つ女坂

あだし野へおのが影追ふあきつかな

楷落葉金色浄土をしつらへり

鳴き負けて御所を罷るる秋の蟬

立冬の雨寂かなり孔子廟

引きとめる母亡く帰路の大銀河

冬うらら国東郷も石仏も

ユトリ口の世界に入りぬパリ晩秋

冬紅葉ほとけ日和を織りなせる

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

平野数子

はたた神婆の呪文に失せにけり

月白の天窓高く京町屋

王将を追ひ詰む縁台藪蚊打つ

花形のゴルフアーへ群る赤蜻蛉

夏の海雲もヨツトもより白く

団栗やボーイスカウト飯を炊く

白南風や音量上げるカーステレオ

秋桜女将修業の三代目

料亭の闇整へる庭ほたる

冬耕の大地へ潜みゆく夕日

命名の筆文字太き良夜かな

バリウム飲む十一月の白き部屋

京鹿子新賞受賞作品抄

京都市

加舎 廣子

行軍の蟻はひたすら行軍す

もみぢひらりやんちや雀の仕業なり

出水後の川は追はるる身となりぬ

捨つるものいまだ七分や冬至粥

宵祭紐となりたる子の兵児帯

藁を緬ふ深き皺の手十二月

蜻蛉や位置についての号砲待つ

黒セーター埃ほつこり集ひくる

奉納鳥居裂け目に茸整列す

寒の月光げに先導されて古希

寡黙には負けしお喋り石露の花

初売の紙折りしごと売子の辞儀

募集大作賞

京都市

樽井明子

何か踏む

鳥雲に取りに行けない忘れもの
開ききるキヤベツの真中閉ざしをり
ぬばたまの女雛が髪に包みしもの
糸桜のんどり空を廻しをり
さざ浪の攫うてゆきし残り鴨
何か踏む少年蛇をぶらさげて
葛の花いづこが私の根元やら

逆光の狗尾草や孵化真際
空中の幾何の講義や鳥威し
白髪と決めしけふより紅葉晴
秋近し夕日に白む雀かな
虫籠や奥より子らの声もつれ
擬宝珠の一花残りてねねの寺
母といふ仮面の奥の雪女郎
傷口のこんなになぶ刈田かな

双滴賞受賞作品

都峰 三賞

春隣予備の釦は裏側に

藤本 純子

なのはなや紛れて母のおんぶひも

井上菜摘子

なかんづく季語のをはりの吾亦紅

鈴鹿けい子

佳子 三賞

太平洋の水をしぼりて卒業す

安田 優歌

母と娘はやはり似ているさくらんぼ

三原 千佳

雷や大黒柱なき暮し

見舘 定子

京鹿子集

豊田都峰選

多分ここに父も来たはず雁渡し

亀岡 井上菜摘子

夕花野棒切れひとつ見当らぬ

さやけしと書かば児の髪匂ふかな

捨て置きし凶面くづの葉繁茂せり

鬼の子の不届きな沙汰陣屋裏

晩学の割符を拾ふ花野行

棉吹いて風は素数になりたがる

秋簾濁音の世に句点うつ

穴惑ひ草の戦ぎを見納めて

空耳の点呼花野は降り難たし

輪とんぼの水辺にあたり安堵せり

吾亦紅この風すぢに母の墓

寿司シエフの新作を食む秋夜長

異国にてピザ食む親子秋日和

メキシコの友の引越し秋の暮

引越しを終へスूप食む秋夕べ

満月や心やさしく酌みかはず

杉玉の新走なり試飲せむ

秋の空雲は綿あめと鯛たち

院展に知人の一点秋晴るる

アリソナ 伊吹 之博

渋川 東 秋茄子

鎌田 政利